

7 波乱の果てにも

「ふんなり（それなら）わしゃどげんすりゃいいんじゃ？」。深夜、突如としてホームを走る叫び声です。そっと同室の人のおむつを換えて出ようとする寮母の後ろ姿に、あびせかけたのです。自分をかまってくれなかったと怒り狂っています。黒田さんは重いほけ。なだめるように優しくかける布団も、着ている上っぱりもほうり出し、まくしたてます。

「ああ情けねえ。わしんこととりあわんじ、どいつもこいつも知らんぷりする。早う死んじまえと思うちよるんじやろう。情けねえ！」。

鳴咽（おえつ）と慟哭（どうく）を交えて、訴えはきりなく続く。寮母はあわてず、背をさすり、心を和らげるように話します。「黒田さん、クジャクをここで上手に飼われていたそうですね」。

「そうじゃ、クジャクが逃げ出し、向こうん山へ飛んじ行っち、ほかん者はだれも助けきらん。私ゃ、早う帰っちこんか、お前の家は任運莊じゃねえか」ち、力ん限り叫びよったら、バタバタいわせち、帰ってきたんじゃ。あげん、うれしいこつは、飼うたもんじゃねえと分からん。その鳥のクソじキュウリやナスやら植えち、皆食べたじゃねえな、忘れたんな？」。

事実、その通りです。感情の抑制力はすっかり衰えていても、自分の存在感への誇りは高く生き続けているが故の、このイラ立ちです。

「おしほりたたみ、おむつたたみ、何でんしよったんで。じゃけんど今は、どげえすりゃいいんか分からんごつなった。お前どう、あとから来た寮母はわしを分かっちゃらん。それが齒がゆうて……」。

自分が思うようにならない、自分が自分でなくなっていく、することがすべ

てちぐはぐ、イラ立ちを越えた恐怖です。その深い不安を知る寮母たちは、彼女がすべてを言い終わるまで静かに聞いてあげます。手を握り、肩をさすりながら。形相さらに凄（すさ）まじく「もう、何もしちくれんじい」。血走った目であたりを探し、床をいざって隣の引き出しに手を入れる。寮母はジュースをすすめ、上着を着せます。

「ほっちいちくれなあ。のどもかわかん。こげえ腹が立っちゃっち、寒いなんか思うな？ どっか切れ物はねえか。それじ、のどをつきゃ、すぐ死ぬるんじや。殺せ！ 早う殺せ！」。

この激烈な錯乱状態には、がん末期の苦痛が加わっているのです。がんが発見されて七年目です。ですから寮母たちはただ痛々しい思いでその姿を見守り、優しく手を添えることに努めます。

「胃がかきまぜられるっ！ こんなに吐くと、わしゃ死ぬかもしれんな？」
「黒田さんには、まだまだ頑張ってもらわないと、任運荘の生き字引ですもの」。「そうじゃ、後から来たもんは何にも知らんきなあ」。

お彼岸法要の放送を聞いて、「寝ちよってバチが当たる。仏間へ連れて行って」と、車いすを押させてのお詣（まい）り。悲壮さと信心こもこもの姿は、皆の心を打ちます。「わしんこつ、先生はほめちくれた。ありがてえこっちゃ、これで死んだ爺（じい）さんとこへ威張って行ける」。

しかし、ついに重篤の床に。怒りもわめき声も、死を口にすることも、もはやありません。体力の衰えもさることながら、まぎれもなく仏さんに成りゆく道をたどっているからです。天の配剤は心身両面に現れます。ただ口を湿らせるだけの末期状態でも、そのたびに「すまんですなーこげんようしてもううち」「ありがとう」。

意識が薄れゆく中で、痛さを案じる寮母へ「どっこもどうもないんで……」と。それが、最後の言葉です。ああ、年改まり昭和も終わろうとする日、み仏に導かれて新生の旅に立たれました。